大正時代の「人魚」像（2）

―― 不安定な社会状況と「人魚」――

九頭見　和　夫

I. はじめに

小川未明が『赤い蠟燭と人魚』を書いた大正時代の中頃から昭和時代のはじめにかけて暗い時代が続く。例えばロシア革命による世界最初の社会主義政権の樹立(1917年)，第一次世界大戦の終結(1918年)，その後に勃発した戦後恐慌，そして関東大震災等社会情勢は大きく揺れ動き，変動の波にさらされた人々の生活に対する不安は一層増大する。一方文学の世界においても，これらの社会情勢を反映した社会主義文学，プロレタリア文学が文壇の主流を形成する。例えば本小論で取り上げる小川未明は，日本社会主義同盟の創立発起人になるなど社会的に弱い立場にある人々に対して心を寄せ,『赤い蠟燭と人魚』等の作品を執筆する。その一方で当時の社会情勢に対して距離をおき，外国文学に親しみ，その移入に力を注いだ詩人たちもいる。例えば本小論で取り上げる萩原朔太郎は，ドストエフスキー等の影響の下に優れた口語詩を書き,また堀口大学は訳詩集『月下の一群』(大正14年)などフランス詩の紹介を通して文壇に大きな影響を与える。なお当時は，生誕百年（大正8年）を迎えたホイットマンの『草の葉』が華々しく紹介されたアメリカ文学をはじめ，前述の堀口大学によるフランス文学，その他ロシア，ドイツ，イギリス等の文学がつぎつぎとわが国で翻訳されたのである。

本小論では，前述の社会状況等をふまえ，大正10年以降に出版された文学作品に登場する「人魚」像の解明に努める。まず最初に，小川未明の童話『赤い蠟燭と人魚』と，その影響が多くの研究者により指摘されているアンデルセンの「人魚姫」との関係を分析するが，この分析の際に「人魚姫」との関係が推測されるドイツ・ロマン派の作家フケーの『ウンディーネ（水妖記)』を紹介する。ついで萩原朔太郎の詩「その襟足は魚である」(詩集『蝶を夢む』所収）を，さらには堀口大学の詩「人魚」(詩集『砂の枕』所収）と堀口自身が翻訳したアポリネールの詩「人魚」を取り上げその関連を分析する。

II. 小川未明の『赤い蠟燭と人魚』，アンデルセンの「人魚姫」，フケーの『ウンディーネ（水妖記)』など

1. 小川未明の『赤い蠟燭と人魚』

小川未明（1882年―1961年）は，早稲田大学で後に雅号「未明」を授けた坪内逍遥の指導を受け，卒論にラフカディオ・ハーンの文学論を取り上げる。卒業後未明は，『愁人』（明治40年)，『緑髪』(明治40年)，『惑星』（明治42年）等の短篇集を出版し小説家として文壇に登場する。その後未明は，無政府主義者大杉栄との交友などを通して社会主義思想に近づくが，ロシア革命後のマルクス主義と彼自身の考える無政府主義との間に大きなギャップがあることを痛感して苦悩する。その頃鈴木三重吉による創作童話を中心とする雑誌『赤い鳥』の創刊（大正7年）に刺激を受けた未明は，大学卒業後から続いていた小説の制作から童話の制作へと活動の中心を変更する。この頃発表されたのが,大正10年2月16日から2月20日にかけて『東京朝日新聞』の夕刊に掲載された童話「赤い蠟燭と人魚」である。なおこの作品は,同年5月,「殿様の茶わん」,「少年と老人」など他の17編とともに天佑社より第4童話集『赤い蠟燭と人魚』として出版される。執筆当時の社会状況の反映によるのか，日本海側に位置すると思われる寒村を舞

台としたこの童話に描かれた世界は限り無く暗く厳しいのである。[1)]

北の海にすむ人魚は,人間のやさしさを信じ,生まれた赤ちゃんを海岸の近くにある神社の石段の下に捨てる。この赤ちゃんを神社の近くで蠟燭を売っている信心深い老夫婦が発見し，家につれ帰り大事に育てる。その後美しい娘に成長した人魚が，赤い絵の具で，白い蠟燭に魚や貝などの絵をかいて売ると，その燃えさしが船の転覆などの災難から守ってくれるお守りになると評判がたち，蠟燭が飛ぶように売れる。

あるとき南の方の国から来た香具師は，人魚の評判を聞き，金もうけのため蠟燭屋の夫婦に人魚を売ることを申し出る。大金に目がくらんだ老夫婦は，人魚の懇願を無視して，香具師に人魚を売る決心をする。一方人魚の娘は部屋に閉じこもり一心に蠟燭の絵を描く。ある月の明るい晩，香具師が人魚の娘を迎えに来たため，せきたてられた人魚の娘は全体を赤く染めた蠟燭を後に残していく。

ある穏やかな晩,「長い黒い頭髪がびっしょりと水にぬれ」た女があらわれ，真っ赤な蠟燭を買っていく。その夜，海は大暴風雨となり，香具師によって檻に入れられた人魚の娘が乗った船が難破する。その後赤い蠟燭がお宮にともると大暴風雨になるという噂がひろがり，その結果お宮に参拝するものもいなくなって，ふもとの町はほろびてしまう。

まずこの「人魚」のすむ地域であるが，井原西鶴の「命とらるる人魚の海」や蒲原有明の「人魚の海」に登場する人魚と同じ北の海であるが，正確には，小川未明の故郷新潟県高田(現上越市)に近い柏崎市周辺の海と推測され，同じ北の海でも北海道の松前にすむ井原西鶴の「人魚」とは少なからず距離が離れている。

> 「朝日新聞からみた，明治，大正，昭和」という「週刊朝日」の特集号で，父は，「この米山に連なる旗持山には，上杉謙信にほろぼされて,ついに大をなさなかつた戦国時代の武将，城資長の古城のあとがあり，さらにその背後の番神岬にはお寺があつて，その灯が暗い海の上からものぞまれた。女が漁夫を慕つて,海の上を泳いできたという物語もあつた。この暗い海に人魚を配し……」と，執筆当時のことを回想している。[2)]

この引用は，小川未明の次女岡上鈴江の証言であるが，彼女はまた，母（未明の妻キチ）からの話として，この作品の舞台が鯨波であることを紹介している。なお米山も鯨波も柏崎市の近郊の町である。ところで小川未明が『赤い蠟燭と人魚』を書くきっかけの一つになった「女が漁夫を慕って，海の上を泳いできたという物語」についてであるが，上笙一郎によれば,[3)] これは，新潟県の高田地方に伝わる民話で，小川未明の主宰する「北方文学2号」(明治45年）に「人魚塚」という題名で掲載されたものであるとのことである。

漁師に恋をした人魚が毎夜佐渡ヶ島から漁師の住む鳥ヶ首の岬をめざして泳いで来る。この一途な人魚の行為におじけついた漁師がお宮の明かりを消したある夜嵐が起こり，目印を失った人魚は浜に打ち上げられる。この事件を契機に浜で魚がとれなくなり町はさびれていく。

以上がこの民話の概略である。ストーリーだけをみれば明らかに『赤い蠟燭と人魚』とは異なっているが，上笙一郎は,「いくつもの共通するファクターがあって，無意識的にもせよ未明が大潟町の人魚伝説に拠ったことは疑いを容れない。」[4)] とのべ，さらに上笙一郎は他にも同様の民話が存在することを指摘する。[5)] 例えば『川越地方昔話集』(昭和12年）に採録されている「田螺長者」の話で,「ある岡の上に神社があって，石段の下にろうそくを商う婆さんの家があった」という書き出しを含め話の内容がほぼ『赤い蠟燭と人魚』と変わらず，明らかに異なるのは，人魚を乗せた船が嵐ではなく大きな魚の出現によってひっくりかえされる最後の場面だけである。

それでは小川未明の描く「人魚」像とは，いかなるものなのか。北の海にすむ人魚の母が,「魚や獣物の中に住んでいるが，もっと人間のほうに近いのだから，人間の中に入って暮らされないこと

はない」[6]と考え，「魚よりも，また獣物よりも，人情があってやさしい」人間である蠟燭屋の老夫婦に生涯を託した人魚の娘についてその容姿を中心に分析する。

お宮の石段の下で老夫婦に発見された時に，かわいらしい女の子の顔をしているが，胴から下は人間の姿ではなく魚の形をしていたため，老夫婦によって「人魚」であることが確認される。その後成長した人魚は，「黒目がちで，美しい頭髪の，肌の色のうす紅をした，おとなしいりこうな子」[7]になる。この人魚で特に注目したいのは，絵をかくことがとても上手なことで，人魚が絵を描いた蠟燭は，海難よけの評判がたち非常によく売れる。また人魚は，育ててくれた老夫婦に対する恩から手が痛くなるのも我慢して，絵をかき続けるやさしさと誠実さも持っている。しかし人間への信頼を裏切られた時人魚の母は，復讐の鬼となって蠟燭屋の老夫婦を含めた町全体を破滅させる容赦のない厳しさも合わせ持っている。

ところでこのような「人魚」像を形成するに際して小川未明は，故郷越後の民話以外に影響を受けたもの，例えば外国の童話などは存在しなかったのか。山室静は，アンデルセンの「人魚姫」を取り上げ両者の関係について比較を試みている。以下少し長くなるが，山室静の見解を引用する。

> 小川未明の『赤い蠟燭と人魚』も，人魚と人間の交渉を扱った作だが，そこには人間と人魚のそんな区別立てはない。人魚はそのままずっと人間の世界にはいって行き，そこに少しの違和も生じない。ただ欲に目がくらんだ人間の夫婦が娘を香具師に売渡すことで悲劇が起り，人魚の母親の復讐によって人間が罰せられるのだが，この悲劇と処罰においても人間と人魚は対等に立っている。あるいは，人魚の方が人間よりも純粋で，愛情もふかく，そしてまた嵐をまき起すほどの力をもった，力強いものとさえされているところがある。しかし加害者である人間にも被害者である人魚にも，浄化はなく，救いはない。……それと比べるとアンデルセンのこの作での人間と人魚は，きびしく差別され，言わば段階づけられているのを見落せない。くわしく見れば，それは動物としての人魚を一段と人間よりも下のものと見，人間の上にさらに天上界をおいた三段構造で，ダンテの『神曲』が描いている，地獄・人間界・天国に何程か対応する，キリスト教の世界観から来たものだ。その各界は厳重に区別されていて，それぞれの世界の間には容易には超えられない断絶があるのだ。だから，人魚姫が人間の世界に入るには，並々でない犠牲をはらわなければならず，人間が天国に入るのも同じことだ。[8]

なお「そんな区別」とは，人魚姫の祖母が人魚姫に話して聞かせた，人間が「足っていうぶかっこうな二本のつっかい棒」[9]をもち，人魚姫の魚のしっぽをみにくいとみなしている人間と人魚の間に存在する肉体的な相違のことである。この人間と人魚の関係をもとにした山室静によるアンデルセンと小川未明の人魚像の相違についての指摘は非常に興味深いので，この山室静の説を検証するために，「人魚姫」がいつ日本に紹介され，いつ頃小川未明と出会ったかを次に考察してみたい。

アンデルセンの作品で最も早く日本に紹介されたのは，明治19年2月発行の河瀬清太郎訳による「小サキ燧火木売ノ女児」（『ニューナショナル第三読本直訳』所収）で，ついで同年11月発行のヤスオカシュンジロウ訳による「王の新しき衣裳」（「羅馬字雑誌」掲載）である。しかしなぜか「人魚姫」の翻訳はかなり遅れ，明治44年4月，上田万年によってアンデルセンの25編の童話が翻訳された『安得仙家庭物語』（鐘美堂）に「小海姫」の題名で掲載されたのが最初である。その後「人魚姫」は，大正9年に西条八十により翻訳され，「人魚ものがたり」の題名で『金の船』に10月から12月にかけて掲載される。時期的にみて小川未明は，同じ童話作家の西条八十が翻訳したこの「人魚ものがたり」に刺激をうけ，これまであたためてきた越後伝説をモチーフにした童話を2ヶ月後の大正10年2月，『東京朝日新聞』に『赤い蠟燭と人魚』の題名で発表した可能性は低くないと推測される。

2.　アンデルセンの「人魚姫」

まずアンデルセンHans Christian Andersen（1805年―1875年）の生涯についてであるが，彼はデンマーク領フェーン島の靴屋の子に生まれ，極貧の中で幼少期をすごす。しかしなぜか彼は多くの後援者に恵まれ，コペンハーゲン大学を卒業する。その後彼は，青春小説『即興詩人』(1835年)や150編を越す主に創作童話を発表し世界的な名声を得る。「人魚姫」が所収されているのは，『子どものための童話』の第三集(1837年)である。内容分析のため童話の梗概を記す。

深い海底に人魚の宮殿があり，6人の美しい姫がすんでいる。15歳になって海上に浮び出ることを許された末の人魚姫は沈没する船から美しい王子を助け出す。王子に一目惚れした人魚姫は，魔女の力を借りて美しい声を失うかわりに人間の姿を得て王の城の侍女になるが，口がきけないため自分の思いを王子に伝えることができない。一方王子は自分を助けてくれたと誤解した隣国の王女と結婚する。不死の魂を持つ人間と結婚できなかった人魚姫は水の泡となって消えねばならない。人魚に戻る方法は一つ，王子の心臓をナイフで突き刺し，その血を自分の足にかけ，もとの魚のしっぽを取り戻すこと。しかし人魚姫は姉たちから渡されたナイフを捨て水の泡となって消えることを決断する。この最後の場面で人魚姫に救済がもたらされる。人魚姫は，水の泡となって消えるかわりに，「すきとおった美しいもの」たちに導かれて，「空気の精の世界」へと昇っていく。そしてこの時，人魚の寿命である三百年の間よいおこないを一生懸命やりつづければ，「死ぬことのないたましいをもらって，人間の永久の幸福を一緒にあじわうことができる」[10]ことを空気の精は示唆するのである。

ところでこの作品については，5年前の1832年に，アンデルセン自身が体験した恩人である王室顧問官ヨナン・コリンの次女ルイーゼへの失恋が色濃く反映した作品といわれているが，特に注目したいのは，「人魚姫」が，従来の人魚に対する不吉なもの，グロテスクなものというイメージを一新し，一途に王子を思う人魚の姿によるのか，人魚がロマンチックなものという印象を読者に与えたことである。このような人魚に対するイメージは，これまでの文学作品にはみられなかったもので，後に出版された，例えばオスカー・ワイルドの『漁師とその魂』や谷崎潤一郎の『人魚の嘆き』にもみられるように，人魚が人間の恋愛の対象に選ばれる契機になった作品と言っても過言ではないのである。

「人魚姫」で特に注目したいのは，王子を惹きつけたその容姿のこともあるが，それ以上に重要なのは，人間の寿命は人魚より短いが不死の魂をもち，天国に昇ることができる，一方人魚は300年の寿命をもつが人間と結婚しない限り不死の魂は得られないため天国にも昇れず水の泡となって消えるという「不死の魂」の問題である。この人魚と人間をわける寿命と「不死の魂」についてであるが，山室静も指摘しているように，「人魚姫」には人間と人魚の間には明らかに越えることのできない大きな格差が存在している。一方小川未明の『赤い蠟燭と人魚』等人間と人魚が対等の関係にある日本の文学作品では，このような格差は認めることができない。しかしこの格差を埋めないかぎり人間と人魚の間の恋愛は永遠に成就することがなく，『イソップ物語』以来教会にかわって読者に教訓を与えることを目的とした童話としては，その役割を放棄したことになる。そこでアンデルセンは，300年間一生懸命よいおこないを続けることによって人魚に不死の魂を与え，オスカー・ワイルドは人間である漁師が不死の魂をすてて人魚のすむ海底に行くことで，人間と人魚の関係を対等にし両者の間に存在する格差の解消を試みるのである。このアンデルセンとオスカー・ワイルドに認められる人間と人魚の間に存在する格差の問題は，キリスト教の影響下にあるヨーロッパで彼らが成長したことと無関係ではないであろう。一方万物に神の存在を認め，悪人ですら救済されるとする宗教感をもつ日本人の中にあって，小川未明や谷崎潤一郎が人間と人魚の間に越えることのできない格差を意識しないのもまた極めて当然な

ことと判断されるのである。ここでアンデルセンの描く「人魚」像，特にその容姿や彼らの生活場所について検討する。

人魚姫は，他の５人の年上の人魚姫たちとともに，「水の上までとどくためには，教会の塔をたくさんつみかさねなければならない」[11] 深い海の底にある人魚のお城に，父である王様や祖母と一緒に生活している。しかしこのお城のある海が，「人魚ひめ」の像のあるコペンハーゲンやアンデルセンが生まれ育ったフェーン島に近い北の海なのか，ルイーゼとの失恋を癒すために企てた長い外国旅行の際にみた，例えば地中海等の南の海なのかは明らかではない。六人の中で最もきれいないちばん下の人魚姫の容姿についてみると，「はだは，ばらの花びらのようにすきとおっていて，きめが細かく，目は，深い湖のように青くすんでいる。」[12] さらに人魚姫は，セイレン以来多くの舟人を誘惑し破滅させた，人魚のすぐれた特性である「陸の上でも海の中でも，一ばん美しい声をもっている」が，人間と同じ足を得ることと引き換えにこの美声を放棄する。ここで小川未明の描く人魚とその容姿を比較すると，未明の人魚が黒目であるのに対し，アンデルセンの人魚はヨーロッパ人なのか青い目である。声については未明はなぜか全く描写していないが，このことは，ギリシャ神話に登場するセイレンとは無縁の日本の人魚だからというよりはむしろ，未明独自の人魚像であるからと推測される。なぜなら井原西鶴や蒲原有明の描く人魚にはその美声が描写されているからである。美声のかわりに未明は，絵を描く才能に優れている，これまでの日本の人魚にはみられない彼独自の人魚像をつくりあげている。なおこれは些細なことであるが，アンデルセンは「人間は水の中では生きていられないこと，死がいにならなければ，お父さまのお城におりてこられないことにきがつきました。」[13] と記し，童話の世界であるにもかかわらず極めて現実的ともいえる人間と人魚の生物学的な相違にも言及している。アンデルセンの「人魚姫」より約半世紀後に出版されたオスカー・ワイルドの『漁師とその魂』（1891 年）では，魂を捨てた漁師が人魚のすむ海に入り人魚と生活を共にするが，このような唯美主義作家といわれるオスカー・ワイルドの発想はアンデルセンの場合にはおそらく想定外なのではなかろうか。「人魚姫」に描かれた世界から判断すると，一見ロマンチストのようにみえるアンデルセンであるが，その生い立ち等がそうさせたのか，彼が非常にリアリステックな面をもつ童話作家であることもまた事実である。

さて小川未明の『赤い蠟燭と人魚』とアンデルセンの「人魚姫」との比較でこれまで特に注目してきた人間と人魚を区別する重要な特性の一つである「不死の魂」についてであるが，さらに検証を続けることにする。これまでオスカー・ワイルドも「魂」を重要視していること，この「不死の魂」という概念は，小川未明の『赤い蠟燭と人魚』のみならず，日本の人魚を扱った文献では全く認められなかったことについてはすでに言及した。ここで問題にしたいのは，この「不死の魂」という概念を人間と人魚の比較の中で取り入れたのは，アンデルセンが最初なのか，あるいは他の人魚を扱った作品の場合にも認められる，ヨーロッパではごく一般的な概念なのかということである。例えば親友であるドイツ・ロマン派の作家の影響は受けなかったのか。アンデルセンは，1840 年の秋から翌年の７月にかけて，ドイツ，イタリア，ギリシャを旅行した際に，かねてその作品に強い関心を抱いていたドイツ・ロマン派の作家フケーと親交を結んでいる。

> アンデルセンは 1840 年にイタリア再遊の旅中で，ヘーゲルの哲学書を読んだりしているが，後期ローマン期における傑作のひとつ「ウンディーネ」（1811 年）の作者フーケと親交をむすんだのもこの年である。水の精が人間の不滅の霊にあこがれて，若い男との結婚を企てたが，それに敗れて悲しい最後をとげるこの物語は，その筋のモチーフにおいて，それよりはるか後のアンデルセンの作「人魚のお姫様」と相通じると評せられるものである。[14]

同様の指摘は他にもある。

騎士と水の精の可憐な恋物語『ウンディーネ』“Undine” 1811（柴田治三郎『水妖記』岩波書店，昭和13）は，ホフマンやロルツィングによってオペラ化され，アンデルセンの『人魚姫』やハウプトマンの『沈鐘』などにも影響をおよぼした古典的な名作である。[15]

以下，フケーの『ウンディーネ』について分析する。

3.　フケーの『ウンディーネ（水妖記）』

フランス貴族の子孫フケー Friedrich de la Motte Fouqué（1777年―1843年）は，水の妖精の物語『ウンディーネ Undine』（1811年）を発表する。以下にこの作品の梗概を記す。

漁師夫婦に育てられ美しい娘に成長した水の精ウンディーネは，若い騎士フルトブラントに愛され結婚し，「魂」を得る。そこに騎士に思いを寄せる伯爵令嬢（実は行方不明になっていた漁師の実の娘）ベルタルダがあらわれ，三人は一緒に生活する。やがて騎士の愛はベルタルダに移り，水の上で罵られたウンディーネは水の精の定めによって人間界を去らねばならなくなる。騎士とベルタルダが結婚した夜，泉から現れたウンディーネは，騎士の部屋を訪れ彼を殺す。騎士の葬式の日，ウンディーネは，騎士の墓をとりまく美しい流れとなって永遠に愛する騎士を抱きつづける。

この作品で特に注目したいのは，ウンディーネが騎士と結婚して獲得した「魂」のことである。水の精には魂はないが，人間は魂を持っている。魂を持たない水の精は，人間より長生きはできるが死ねば人間の魂が永遠に生きつづける場合とは異なり，泡となって消えてしまわねばならない。魂を獲得する唯一の方法は，魂を持つ人間に愛されて結婚することである。ここまでは王子と結婚し不死の魂を獲得しようとする「人魚姫」の構成と全く同じで，「人魚姫」が『ウンディーネ』の影響を受けたことは明らかである。この後，騎士と結婚し「魂」を得たウンディーネが，水の上で騎士に罵られたため，再びもとの水の精に戻るという発想はフケー独自のもので他の作品には認められないものである。人間には永久に付与されている「魂」が，水の精の場合には人間の愛を失った時に消滅してしまう。人間との格差は明白である。しかし最後に救済があるのは，「人魚姫」と同じである。魂を喪失した水の精であっても，美しい流れとなって，愛する者の眠る墓を抱き続けることは可能なのである。この点も救済のない小川未明の『赤い蠟燭と人魚』とは大きく異なっている。以下の引用は，「魂」の重みについてのウンディーネの率直な告白である。

魂って重い荷物に違いないわ。とても重いものに違いないわ。だって，そのかたちが近づいて来るだけでも，もう私には居ても立ってもいられないような心配や悲しみが影のように覆いかぶさって来るんですもの。いつもはあんなに軽い，楽しい気持でいられたのに。[16]

このフケーの『ウンディーネ』とほぼ同一の内容を持った戯曲『オンディーヌ Ondine』が，1938年ジャン・ジロドウ Jean Giraudoux（1882年―1944年）によって発表される。フケーの『ウンディーネ』との大きな相違は，ウンディーネが，一時的にせよ，騎士と結婚することで魂を得たのに対し，オンディーヌは生涯水の精に留まり魂を持つことはない。騎士の死後記憶を失ったオンディーヌは，水界の王に連れられ水の底へと去っていく，これが『オンディーヌ』の最後の場面である。

III.　萩原朔太郎の詩「その襟足は魚である」

旧制熊本の五高，岡山の六高，慶応大学で落第を繰り返した萩原朔太郎（1886年―1924年）は，大正6年処女詩集『月に吠える』によって森鷗外や野口米次郎に注目される。その後，詩『新しき欲情』（大正11年），第二詩集『青猫』（大正12年）等を発表し，詩人として不動の評価を得る。nymph（水の精）が登場するのは，この頃（大正12年）新潮社から発行された第三詩集『蝶を夢む』に収録された詩60篇の一つ「その襟足は魚である」である。

ふかい谷間からおよぎあがる魚類のやうで
いつもしつとり濡れて青ざめてゐるながい襟

足
すべすべと磨きあげた大理石の柱のやうで
まつすぐでまつ白で
それでゐて恥かしがりの襟足
このなよなよとした襟くびのみだらな曲線
いつもおしろいで塗りあげたすてきな建築
そのおしろいのねばねばと肌にねばりつく魚の感覚
またその魚類の半襟のなかでおよいでゐるありさまはどうです
ああこのなまめかしい直線のもつふしぎな誘惑
そのぬらぬらとした魚類の音楽にはたへられない
あはれ身を藻草のたぐひとなし
はやくこの奇異なる建築の柱にねばりつきたい
はやく　はやく　この解きがたい夢のNymphに身をまかせて[17]

ギリシャ・ローマ神話に登場する，海や川などに住むといわれる美少女の姿をした妖精nymph。朔太郎は，その襟足に注目し，艶かしい肉感的な表現によって読者に対し生々しい女性の肉体を連想させるのである。昭和2年の伊豆湯ケ島温泉で知り合って以来，朔太郎を師とあおいだ三好達治も，「その手は菓子である」について，「何といふ自由な溢れるやうな無邪気な諧謔とエロティスムとの出会いであらう。」と述べたあと，同様の内容を持つ詩として，「その襟足は魚である」等の詩を列挙する。

「薄暮の部屋」，「寝台を求む」，「強い腕に抱かる」，「腕のある寝台」，「その襟足は魚である」等みなさうであるけれどもこの系列の作品は，次第にその軽々とした無邪気な鞠のやうにはづむ弾力の方を削り落していつて「艶めかしい墓場」，「くづれる肉体」とその題名が示すやうに，何かしらSex事後の疲憊倦怠めいた幻覚世界に移つて行き，それだけまた先の彷徨詩の思想的内容ともいくらか相接近する傾向をとる。[18]

IV．堀口大学の詩「人魚」

堀口大学（1892年―1981年）は，「自伝」によれば，[19] 4歳で母を失い，慶応大学文学部予科入学後，外交官の父の任地メキシコ，スペイン，ブラジル，ルーマニア等ですごす。1911年，メキシコ滞在中にフランス語を熱心に学び，1925年訳詩集『月下の一群』を発表して，アポリネール等フランスの詩人の紹介を行い日本の詩壇に多大の貢献をする。人魚が登場するのは，第四詩集『砂の枕』（大正15年）所収の「慇懃」（33篇の詩で構成）で，詩の題名は「人魚」である。

人魚よ
海は碧い
海風は涼しい
カプレの島が見える

ユリシスのやうに
私はおそれないぞ
お前たちの歌を

銀と青との菱格子の
猿股をはいた
魚の女たちよ

歌つてくれ
もつと近くへ来て
巻貝のメガフォンをとつて

そして私を誘つてくれ
暗礁の方へ
ああ　暗礁の方へ[20]

ここには美声によって多くの舟人を誘惑し破滅へと導いたセイレン以来の誘惑者としての人魚像が描写されている。このような人魚像を形成する上で堀口大学に大きな影響を与えたと推測されるのがフランスの近代詩人，例えばアポリネールGuillaume Apollinaire（1880年―1918年）である。堀口大学が翻訳したアポリネールの『動物詩集』（1911年）に詩「人魚たち」が掲載されている。

人魚たちよ，教えてくれ
夜陰，沖つべはるかにいて
君らが嘆くあの時の
あの悲しみはなに故か？
わたつみよ，そなたさながらこの僕も，
妙な音声でいっぱいだ。
歌を積荷の僕の舟
その名は「未来の栄光丸」[21]

ローレライを連想させる詩である。詩集『アルコール』(1913年)にも同様の内容の詩「ライン河の夜」があるのでその一部を紹介する。

ライン　ラインは葡萄酒の影をうつして酔い
夜ごとの星々の金はふるえながら降り水面に照り映え
あの声は臨終の喘ぎさながら歌いつづける
夏に呪文をかけるあの緑の髪した妖精たちを[22]

アポリネールは，1901年から約1年間家庭教師としてドイツに滞在したが，引用した詩はいずれもその時の体験をもとに書かれたと推測され，アポリネールの前半期の詩の特徴であるヴェルレーヌ等象徴派の詩人達の影響が色濃く反映している詩である。

V. おわりに

本小論では，小川未明の童話『赤い蠟燭と人魚』を取り上げ，この作品に影響を与えたと推測されるアンデルセンの童話「人魚姫」との比較検討をした。両作品とも人魚と人間の関係，特に人魚の人間に対する信頼と人魚の信頼に対する人間の裏切り，が描写されている。しかし両作品の結論は異なる。『赤い蠟燭と人魚』では，信頼しわが子を託した人魚の母親が，信頼を裏切りわが子を香具師に売った老夫婦を含めた町全体に対し復讐するが，この作品には何の救いもない。一方，アンデルセンの「人魚姫」では，王子の命を救い，王子への愛にめざめた人魚姫に対し，王子は人魚姫の愛に気づかずほかの女性と結婚し結果として人魚姫を裏切ることになるが，最後に水の泡となって消える人魚姫に対して空気の精から救済の手がさしのべられる。両作品には，人間と人魚の関係で注目すべきことがもう一つある。それは，人間と人魚のおかれたいわゆる身分の相違である。『赤い蠟燭と人魚』には，小川未明の宗教観によるのか，両者の立場は対等で身分上越えられない溝はない。一方，アンデルセンの「人魚姫」には，人間と人魚の間には大きな格差が存在する。人間の寿命は人魚に比べ短いが不死の魂を持ち，人間には天国への道が開かれている。それに対し人魚には，300年という人間より長い寿命を与えられているが，不死の魂はなく，人間と結婚して不死の魂を得ない限り水の泡となって消えねばならない。アンデルセンの「人魚姫」の背景には，天国，人間界，動物界という明白な差別が存在する。この「魂」の問題は，アンデルセンに影響を与えたと推測されるフケーの『ウンディーネ（水妖記）』にも認められる。おそらくこの「魂」の問題，人間と人魚の差別の問題は，突き詰めればアンデルセンやフケーが依って立つ，キリスト教という宗教の問題と判断されるのである。

またこの小論では，萩原朔太郎の詩「その襟足は魚である」（『蝶を夢む』所収）と堀口大学の詩「人魚」（『砂枕』所収）を取り上げたが，そこには暗い時代に距離をおいた二人の詩人による外国文学の影響が濃厚な人魚像が描写されている。なお堀口大学については，彼の人魚像形成に影響を与えたと推測される，彼自身の翻訳になるアポリネールの詩「人魚たち」や「ライン河の夜」も取り上げた。いずれもローレライ伝説の影響が読み取れる詩である。

（2008年4月14日受理）

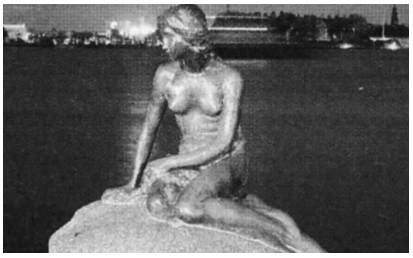
注

1) 『定本小川未明全集1』（講談社，昭和51年）pp. 264-278.
2) 岡上鈴江『「赤い蠟燭と人魚」をつくった小川未明―父小川未明―』（ゆまに書房，1998年）p. 199.
3) 上笙一郎『未明童話の本質―赤い蠟燭と人魚の研究―』（勁草書房，1966年）pp. 101-104.
4) 上笙一郎『児童文学の散歩道』（理論社，1980年）p. 199.
5) 同前掲書。pp. 199-200.

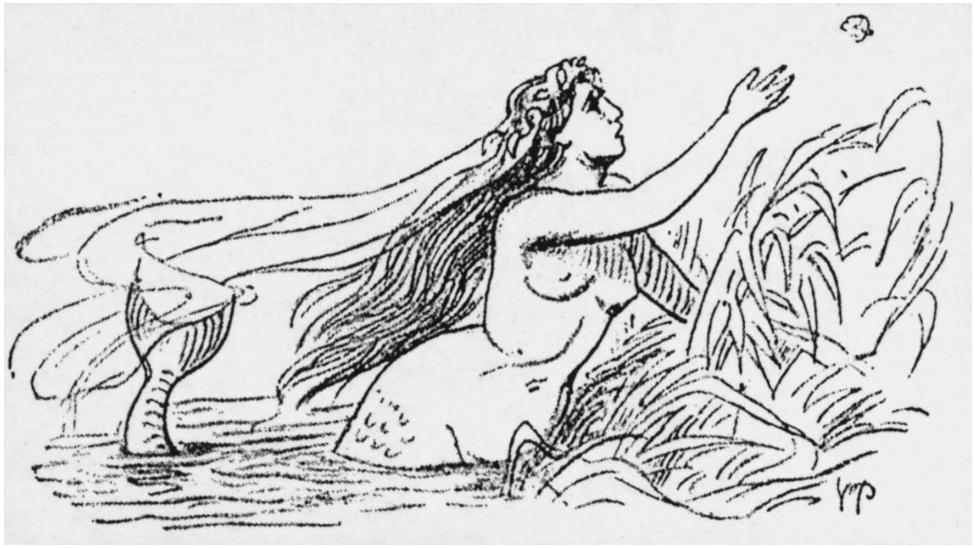
6）『定本小川未明童話全集 1』p. 265.
7）同前掲書。p. 269.
8）山室　静『アンデルセンの生涯』（新潮社，昭和 50 年）p. 235.
9）高橋健二訳『アンデルセン童話全集 1』（小学館，昭和 54 年）p. 146.
10）同前掲書。p. 166.
11）同前掲書。p. 127.
12）同前掲書。p. 128.
13）同前掲書。p. 138.
14）日本児童文学会編『アンデルセン研究』（小峰書店，1975 年）pp. 117–118.
15）荒俣　宏『世界幻想作家事典』（国書刊行会，1981 年）p. 148.
16）柴田治三郎訳『水妖記（ウンディーネ）』（岩波書店，1978 年）pp. 59–60.
17）『萩原朔太郎全集・第一巻』（筑摩書房，昭和 50 年）pp. 278–279.
18）三好達治『萩原朔太郎』（筑摩書房，昭和 39 年）p. 139.
19）『現代日本詩人全集 5』（創元社，昭和 29 年）p. 68.
20）同前掲書。p. 123.
21）堀口大学，窪田般弥，飯島耕一，入沢康夫訳『アポリネール全集 1』（青土社，1979 年）p. 41.
22）同前掲書。p. 197.



小川未明『赤い蠟燭と人魚』（講談社）



コペンハーゲンの港に建つ「人魚姫」の像



アンデルセン「人魚姫」（小学館）



フケー『ウンディーネ』の挿画
（フリードリヒ・リヒター作）



堀口大学『砂の枕』の挿画
（長谷川　潔作）

Das Bild der „Seejungfrau“ in der Taisho-Zeit（2）: die unbeständigen Sozialumstände und die „Seejungfrau“

KUZUMI Kazuo

Von der Mitte der Taisho-Zeit zum Anfang der Showa-Zeit, wo der Schriftsteller OGAWA Mimei das Märchen „Akai-rosoku-to-ningyo（赤い蠟燭と人魚）“ geschrieben hat, dauerte die dunkle Zeit an：die Geburt der ersten sozialistischen Regierung in der Welt durch die Russischen Revolution, der Abschluss des Ersten Weltkriegs, die wirtschaftliche Krise nach dem Krieg und Kanto-daishinsai（das große Erdbeben in der Kanto-Gegend）usw.. Die Sozialumstände schwankten heftig und die Leute vermehrten die Angst zum täglichen Leben in der Änderung.

In der literarischen Welt bildete auch die sozialistische Literatur den Hauptfluss. OGAWA Mimei richtete seine Gedanken auf die armen Leute in der Gesellschaft. Einerseits waren die Dichter, wie HAGIWARA Sakutaro und HORIGUCHI Daigaku, die von den dunklen Sozialumständen Abstand hielten und mit der ausländischen Literatur befreundet waren.

Nun werden in diesem kleinen Aufsatz für die Erläuterung des Bildes der „Seejungfrau“ in der Taisho-Zeit die folgenden Werke hauptsächlich untersucht und wird vor allem der Einfluss der literarischen Werke in Europa bestätigt.

1. （1）Das Märchen „Akai-rosoku-to-ningyo（赤い蠟燭と人魚）“ von OGAWA Mimei und das Märchen „Ningyo-hime（人魚姫）“ von Andersen.
（2）Das Märchen „Ningyo-hime（人魚姫）“ von Andersen und das Märchen „Undine（Sui-yo-ki 水妖記）“ von Fouqué.
2. Das Gedicht „Sono-eriashi-wa-sakana-dearu（その襟足は魚である）“（in „Cho-wo-yumemu 蝶を夢む“）von HAGIWARA Sakutaro.
3. Das Gedicht „Ningyo（人魚）“（in „Suna-no-makura 砂の枕“）von HORIGUCHI Daigaku und das Gedicht „Ningyo-tachi（人魚たち）“（in „Dobutsu-shisyu 動物詩集“）von Apollinaire.